和歌山市

北区

紀州・和歌山 歴史ロードマップ

北区と和歌山市のつながり

和歌山城

和歌山市出身で日本外交に輝かしい功績を残した“カミソリ大臣”陸奥宗光

陸奥宗光の功績

[陸奥宗光]
提供：和歌山市立博物館

紀州藩士であり国学者でもある伊達宗広の六子として生まれた陸奥宗光(1844~1897)。幼少期を和歌山城下（和歌山市）で過ごしたが、父・宗広が藩内の抗争に敗れ失脚、脱藩した後、尊王攘夷運動に参加した。その後勝海舟の海軍塾に入塾。慶応3年（1867）には坂本龍馬の海援隊に入るなど、さまざまな人物との交流を深めていった。明治維新後、紀州藩十四代藩主徳川茂承（もちつぐ）に信頼され、津田出（つだいずる）と共に藩政改革に邁進した。国政に進出し農商務大臣を務めた後、第2次伊藤博文内閣で外務大臣となり、江戸時代に結ばれた不平等条約、領事裁判権の撤廃や日清戦争の講和条約（下関条約）を結ぶなどの偉業を達成した。

博学で頭の良い宗光を人々は「頭の切れる者（頭の回転が早い）」という意味を込めて「カミソリ大臣」と呼んだ。宗光はたとえ上司であっても自分が認めた者でないと命令を無視したり、辞表をたたきつけたりしたという逸話もある。逆に自分の上司としてふさわしいと認めた人物には従順に接し、惜しみなくその才能を発揮した。「使い手（上司）の技量が問われ、使い方を間違えるとケガをする」という意味もまた「カミソリ」であった。

渋沢栄一と陸奥宗光は仲が良かった!?

[渋沢栄一]
「近代日本人の肖像」（国立国会図書館）を加工して作成

渋沢栄一(1840~1931)と陸奥宗光の付き合いは、明治3~4年(1870~1871)に陸奥が和歌山藩の用務で欧米へ訪れた際に、アメリカで伊藤博文とともに大蔵省の用務で訪れていた渋沢と出会ったことに始まる。陸奥は伊藤と旧知の間柄であり、一行とともに日本へ帰国した。

その後、廃藩置県を経て、明治4年(1871)8月神奈川県知事となった陸奥は、政府の租税制度の改革に関する意見書を提出していたため、明治5年(1872)6月に大蔵省の租税頭兼勤となり、渋沢の同僚となった。明治6年(1873)1月には、前年に操業開始した群馬県の富岡製糸場へ陸奥と渋沢は共に視察に訪れている。同年5月に渋沢は政府内部の意見対立により辞職するが、渋沢の後任として大蔵省三等出仕となったのが陸奥であった。

その後、陸奥が獄中生活を終え、ヨーロッパへ外遊する際にも渋沢は資金提供し、陸奥はたびたび渋沢に手紙を送った。のちに渋沢は陸奥を「一を聞いて十を知る機敏な頭脳を持っていて、そういう人は余りに先回りするので他人に嫌がられるものだが、至って交際しやすい人であつた。私が陸奥をちょっと世話した縁故によって、ヨーロッパに訪れている時も始終手紙を寄せてくれ、手紙を数百通も所持している。知人から私に送られた手紙のうちで陸奥のものが一番多いと思う」(現代語訳)と述べている(「実験　論語処世談」)。のちに陸奥が農商務大臣となった時には、富岡製糸場の買い取りを渋沢に頼んだこともあったという。また、渋沢の支援で多くの鉱山開発を行った実業家の古河市兵衛が陸奥の次男を養子にむかえたり、陸奥の従弟である岡崎邦輔が渋沢らとともに京阪電気鉄道の設立に携わったりなど、両者の親族も交えた交流も行われていた。

万葉人や歴代藩主が愛した和歌の聖地「和歌の浦」

和歌の聖地の誕生

六義園のモデル
和歌の浦
へ行こう！

潮の干満によって干潟が現れては消え、刻一刻と変化しながら、四季折々の多彩な風景を魅せる和歌の浦。

和歌の浦は、和歌山市南部と海南市北部に位置する和歌浦湾をとり巻く景勝地である。和歌川の河口に広がる干潟を中心に、南は熊野参詣道・藤白坂から西は紀伊水道に面した雑賀崎まで、緑豊かな山並みと穏やかな海に抱かれた絶景の宝庫だ。

今から1300年前の奈良時代、「若の浦」と呼ばれていたこの地を訪れた聖武天皇が、玉のように美しく島々が連なる眺望に感動して詔を発し、玉津島の神と明光浦霊を祀り、この風景を末永く守るように命じた。行幸に従った万葉歌人の山部赤人が、和歌の浦の情景を讃え詠んだ躍動感にあふれる歌は、今も広く知られている。

平安時代の歌人・紀貫之がこの山部赤人の歌を、和歌の聖典とされる『古今和歌集』でとり上げたことから、和歌の聖地として崇められ、和歌の神が祀られ、やがて「和歌の浦」と呼ばれるようになった。熊野参詣や西国巡礼の際に、時の関白や大臣までもが訪れ、多くの和歌や物語に詠み込まれた。

江戸時代には、万葉歌や新古今和歌集に詠われた情景を描いた「和歌浦十景」が描かれ、数々の美術工芸品の題材となった。また、和歌の浦を模した庭園（六義園）が江戸に作られるなど、和歌の浦の風景は天下に名を馳せる名所となり、文化人たちの憧れとなった。

天下人や藩主も惚れ込んだ絶景

玉津島神社裏
奠供（てんぐ）山からの景色

紀州攻めを行った羽柴（豊臣）秀吉が和歌の浦の景観に感動し、北方の岡山に築いた城を和歌の浦にちなんで「和歌山城」と名付けたことで、その城下が和歌山と呼ばれるようになり、現在の県名へと繋がったとされる。

江戸時代になると、徳川家康の十男である頼宣が、紀州徳川家の初代藩主として和歌山城に入り、和歌の浦の北西にそびえる権現山の中腹に父・家康を祀る東照宮を建立するとともに、干潟に浮かぶ妹背山には母・養珠院（お万の方）を偲ぶ多宝塔を建てた。さらに妹背山に三断橋を架けて観海閣を設け、風景を楽しむ場として民衆に開放した。

近代では、夏目漱石など文人墨客も来遊しており、南方の琴の浦には温山荘園が築かれ、皇族や大臣も訪れた。

そして現代、400年以上の歴史を伝える和歌祭の絢爛豪華な行列や、環境保全活動、万葉歌の勉強会などの活動も地元で進められ、時代を越えて人々を魅了し続けるすばらしき遺産を次世代へ伝える取組みが行われている。

紀州藩主だった八代将軍徳川吉宗が飛鳥山公園の桜をプロデュース

徳川吉宗と飛鳥山公園

[徳川吉宗] 提供：和歌山市立博物館

江戸幕府八代将軍・徳川吉宗(1684~1751)は、時代劇ドラマ「暴れん坊将軍」のモデルであり、江戸幕府の中興の祖として徳川歴代将軍の中では特に知名度の高い人物である。

吉宗は徳川御三家の1つ、紀州徳川家二代・徳川光貞の四男として生まれたため、本来であれば家を継承する可能性はゼロに近かったが、兄達が相次いで亡くなった事で紀州藩55万5千石の藩主となった。さらに七代将軍徳川家継が急死した際に後継者がいなかった事から、周囲の後押しもあって思いがけず八代将軍に就任したという強運の持ち主でもある。

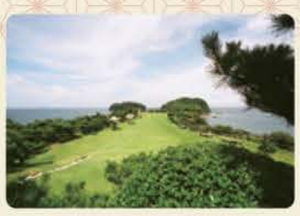
将軍に就任した吉宗は、有能な人材を登用したり、新田開発を推奨して年貢収入の増加を実現する等今でいう行政改革を進める事で当時財政的に疲弊していた幕府政治の立て直しに成功した。いわゆる享保の改革である。

この享保の改革は、肥大化した財政赤字を解消するため、武士から庶民に至るまで厳しい倹約を徹底させているが、その一方で新たな桜の名所が誕生したという一面もあった。当時江戸における花見の代表的名所は上野・寛永寺であったが、行楽客が増加して混雑がひどいという課題を抱えていた。そこで吉宗は上野以外にも桜の名所を作る事で混雑の緩和を思い立ち、享保5年(1720)からたくさんの桜の苗木を飛鳥山に植えさせたのである。この政策によって飛鳥山は江戸における桜の一大名所に成長し、現在に至るまで多くの東京都民の目を楽しませる存在となった。以上の経緯からまさに徳川吉宗は飛鳥山公園の生みの親であったと言えよう。

飛鳥山公園

和歌の浦の名所を巡る

山部赤人の万葉歌碑


番所庭園（ばんどこていえん）
異国船の見張り番所跡

養翠園（ようすいえん）
池泉回遊式の大名庭園

不老橋（ふろうばし）
藩主のお成り道に架けられた石橋

紀三井寺（きみいでら）
歴代藩主が祈願に参拝

和歌浦天満宮（わかうらてんまんぐう）
和歌浦湾を見守る学問の神様を祀る

紀州東照宮（きしゅうとうしょうぐう）
関西の日光とも呼ばれている